

連載

フィールド・アイ

Field Eye

デリーから——③

JETRO アジア経済研究所
在デリー海外研究員

太田 仁志

Hitoshi Ota



ハイコスト (?) 経済に暮らし働く人たち

今年の1月末に転居するまで借りていた部屋の階上にはギリシャ人夫妻が住んでいた。インドでは家事手伝いを雇うことが珍しくないが、その夫妻の家に通うガヤトリ(仮名)がある朝、アパートに着いて筆者を見つけるなり、一気にまくし立てる。なんでもバス停から乗ったオートリキシャ(3輪の小型タクシー、以下「オート」)の運転手に過大な料金を取られたらしい。この手の話は外国人にはあることだし、オートを嫌がるインドの人たちがいることも前から知っていたが、その時、ふと思うところがあった。話はそれるが、まじめな運転手は多いはずだが、オートに関わるトラブルの多くが言い値で料金を請求されること、お釣りがないと開き直られること、渋滞や道に迷った際のお金費用を請求されること、など、なかには運転手の言いがかりでしかないようなものもある。彼らの肩を持つつもりはないが、他方で2010年6月の料金改定まで、メーター料金が物価上昇に追い付いていなかった部分もあった。筆者がデリーの地理とかけ引きに疎くないからか、個人的な経験ではデリーでオートに乗る際の事前の料金交渉で言い値を運転手に聞くと、希望額に10ルピーを上乗せしているケースが多い。だから10ルピーは値切れることがしばしばである。その値切った後の値について、筆者には、実は驚くほどに改定後のメーター料金に近く、また運転手の間にしっかりと相場観があるという印象がある。つまり、彼らは市場に敏感であるということだ。

冒頭に転居したと述べたが、こんな事情だった。筆者は今回、2009年10月末から2年の予定でデリーに赴任していて、住居は当初から2年契約だった。契約

には1年の経過後は、2カ月前の通知による契約解除に関する項目があり、契約からちょうど10カ月のころ、(元)家主が家賃の2割の引き上げを求めてきた。インドでも通常こういった家賃の引き上げは行われない。同意できなければ退去してもらいたいというので、それならと書面による正式な手続きを求めたところ、その後何の連絡もない。こちらから退去するつもりはなかったのに、確認に問い合わせると、ぶつぶついいながら、やっぱりこのまま住んでいていい、でも来月の家賃はちょっと多めによろしく、などとわけのわからないことをいってくる。ばたばたしていたこともあって、そのままにしておいたある日、不動産業者が若いインド人夫婦を伴って部屋にやって来た。聞くところ家主は彼らに、筆者が年末に帰国すると話していたらしい。翌々日、契約解除通知が家主から届いた。

ところが契約解除まで1カ月になったころ、解除通知はなかったことにして欲しいと家主がいう。はっきりとはいわないが、どうも先のインド人夫婦が入居約束を取り消したらしく、また別の希望者も現れなかったようだ。こちらはやはりばたばたしていたのと、これまでの経験からまた同じようなことが起こるだろうと考え、無意味に振り回されて仕事に支障をきたすような事態は避けたかったので、今回は筆者から退去する旨を伝え、2カ月後の1月末に転居した次第であった。入門レベルのゲーム論のテキストに出てきそうな、トホホなケースである(筆者にはそうでもなかったが)。

しかし話はこれで終わらない。入居の際に渡した敷金は退去時に小切手で返してもらうことになっていた。インドでは個人レベルでも小切手での支払いが一般に行われていて、支払い額を数字と英語で2回書く必要がある。意図のかどうかはいざ知らず、もらった小切手はその2つの額が一致していない。加筆で済むことだったので、その場で家主に直してもらい、翌日銀行に預けたところ、はっきりしない理由で2度にわたって支払い拒否の通知を受け、銀行が悪い、という家主に新しい小切手を切ってもらった。その小切手は記入個所の誤りを問題ないように修正したものだったが、少し前から金融機関での小切手の取り扱いがより厳格になったため、再度支払いを拒否され、結局3枚目の小切手、銀行での4度目の請求で、ようやく敷金が戻ってきた。その間、銀行のシステム・サーバーがダウンしていたこともあった。はじめに小切手をも

らってから3週間もかかったことに、新居探しの仲介業者も呆れかえっていた。

さてその新居では、長らく借り手がいなかったため、(新しい)家主は筆者を喜んで迎えてくれた。しかしちょっとした条件付きで、外の小部屋に住む若い男性をこれまで通り、部屋の家事手伝いとしてどうしても雇って欲しいという。この人物は筆者の入居後、月1000ルピーで床掃除をそれまでしていた別の通いの女性の仕事はこれからは自分がするから、その代わりに自分への賃金をその分上げて欲しい、と女性を勝手に辞めさせてしまった。しかしその後2週間ほどでこの人物はわけあって職を離れたため、現在は、先のギリシャ人夫妻が急ぎよ国に戻ってしまったこともあり、ガヤトリにしばらくの間、部屋の掃除をお願いしている。

ガヤトリにもこんな話がある。2009年に入居した翌朝すぐに部屋にやって来て、家事手伝いのできる腕のいい親族がいるので雇わないかという。紹介された義兄には、何をしたのか知らないが、アイロンで穴を数カ所開けられた。売り込み文句は美辞麗句でも、聞くと床掃除はバイトで食堂を数回掃いたことがあるだけ、ということもあった。そんななかでそれなりに仕事ができ、また鍵も預けられる家事手伝いの人たちは重宝される。ガヤトリいわく、ギリシャ人夫妻も彼女のことをとても気に入ってくれていて、帰国の際に彼女は大泣きし、家族ともどもギリシャに家事手伝いで連れて行ってもらえないかと聞いたら、国の事情で無理と断られたらしい。日本はどうなの、と笑顔で筆者にも聞いてきたが、ガヤトリの目は真剣そのものだった。以前、カナダへの移住を希望した夫が悪い業者に騙されて、彼女の宝石を売るなどしても工面できなかった半分の20万ルピーの借金だけが残ってしまい、だから彼女はいくつかの家での仕事を掛け持ちしている¹⁾。筆者が転居するとき不要になった台所用品をあげたら、外国のマダムとサーはみんないい人たちばかりと涙目でいう。変な外国人は間違いなくいるし、こちらは捨てるのがもったいないので声をかけただけ

だったのだが、ガヤトリは家族が詐欺にあったこともあるせいか、インドの人たちにちょっと懐疑的かもしれない。

個人の経験を延々と記し恐縮しているが、つまり、インドでは日常的に、なくてもいいことがいろいろと、カジュアルに起こる。詐欺などの犯罪・違法行為はもちろん論外だが、必ずしも悪意のないなかで、また期待されていたことが起こらない、ということを含めて。家賃の話はインドの人たちも驚くが、それでも筆者はこれまでの経験から、インドでは大体こんな感じとまじめに考えている。一言でいうと、いろいろあって物事がスムーズに進まない。そんな経済社会に暮らし仕事をするのがインドの人たちだとふと思ったのが、冒頭のくだりである。ガヤトリの例ではないが、別に彼らも次から次へといろいろと起こることを楽しんでいるわけではどうもないようだ。下世話な話をすれば、いろいろなことがカジュアルに起こるようなところで仕事をしていれば、効率が損なわれることになっても不思議はない。国民所得もその分低下しているはず、などと野暮なことをいうつもりもない。しかし、できる人や立ち回りの上手い人たちはそれでも成果を上げているだろうが、普通の人たちは持っている力を十分に発揮できていない、あるいはその機会すら与えられていないかもしれない。いろいろなことを引き起こすのもまた人ではあるが、もしそうだとしたら、仕組みを含めて見直してもいいのではないかと思う。いずれにしても、物事がスムーズに進み出した時のインドの力はそれだけで今よりも大きくなるはずだ。

1) ちなみにギリシャ人夫妻宅でのガヤトリの月給は5600ルピーだった。

おおた・ひとし 日本貿易振興機構アジア経済研究所在デリー海外研究員。最近の論文に「組織化趨勢でみる労働組合の代表性と労働運動の動態」(近藤則夫編『インド民主主義体制のゆくえ——挑戦と変容』日本貿易振興機構アジア経済研究所、2009年)など。労働経済専攻。